

成人期における人とのつながりの無さが 自己愛・ポジティブ感情特性・孤独感に与える影響 —日本人とアメリカ人の比較—

Effects of lack of connection with others in adulthood is a key determinant of narcissism,
positive emotion traits, and loneliness
—Comparison of Japanese and Americans—

本田 周二

大妻女子大学人間関係学部

Shuji Honda

Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-shi, Tokyo, 206-8540 Japan

キーワード：友人関係，国際比較，Well-being

Key words : Friendship, International comparison, Well-being

抄録

本研究では，成人期以降の友人関係を含めた人とのつながりに焦点をあて，友人関係を含め人とのつながりを持たない人の特徴（自己愛，ポジティブ感情特性，孤独感）について明らかにすることを目的とする．なお，友人関係に関する研究の多くが欧米で行われており，異文化間の視点から研究することの必要性を主張されていることから，日本人サンプルとアメリカ人サンプルのデータを収集し，検討することとする．30代，40代の男女1,000名を調査対象者とした．日本人500名（男性250名，女性250名， $M=40.11$ ， $SD=5.91$ ），アメリカ人500名（男性250名，女性250名， $M=39.18$ ， $SD=5.51$ ）であった．サンプルは，クロスマーケティング社の有するパネルを利用し，Web上にて参加者を募った．分析の結果，人とのつながりがない人は自己愛に関する両価的な側面の低さ，ポジティブ感情特性の低さ，孤独感の高さが特徴であることが明らかとなった．そして，友人のいない人の数や友人関係満足感，孤独感との関連など，一部，国による違いも見いだされた．今後は，縦断研究や質的アプローチ，また，他の文化圏のデータを収集し比較することが必要であろう．

1. 問題と目的

友人関係は，個人の身体的・精神的健康や成長にとって重要な対人関係の様式である．これまでの研究を概観すると，友人関係は悩みの種にもなりうるが，ソーシャルサポートの一つであり，ストレスの緩衝効果として重要な役割を果たしていることが明らかとなっている^[1]．友人関係に関する研究は児童期から青年期を対象としたものが中心であり，成人期などそれ以外の世代を対象とした知見はあまり見られない．しかしながら，高齢者における友人関係の研究の必要性を主張する研究^[2]など，児童期や青年期に限らない多様な年代における友人関係に関する研究の蓄積が求めら

れている．

それでは，成人期において友人関係はどのような意味を持つのであろうか．ここでは，ソーシャルサポートとして，成人において友人関係の重要性が高まる可能性に着目する．令和4年労働安全衛生調査^[3]によると，ストレスを感じたときに相談できる相手として「家族・友人」の割合が62.0%と最も高いことが明らかとなっている．また，令和4年中における自殺の状況^[4]を見ると，年齢別自殺者数に関して，10代の割合が3.6%であるのに対し，20代以降は10%以上であり，特に40代では16.7%と高くなっている．そして，その原因の多くは，健康や家庭，経済・生活問題などのストレス

によるものである。このように、成人のストレスは深刻なものであり、精神的健康への影響が大きく、そのストレスを低減するソーシャルサポートとして友人関係は重要であると考えられる。このことは、職場での仲間関係に関する先行研究からも示唆される。例えば、Dickie^[5]は、職場内での仲間関係やチームワークが良好なことが組織の安定性や生産性にプラスに働くことを明らかにしている。また、Sias, Heath, Perry, Silva, & Fix^[6]は、職場での従業員同士の友情が悪化することで、精神的ストレスが増加することや仕事遂行能力の低下、離職につながることを明らかにしている。つまり、職場での良好な関係性は当人の精神的健康のみならずパフォーマンスの向上にも寄与する。

また、ソーシャルサポートにはストレスの低減だけではなく、サポートの受け手の理想自己（こうありたいと望んでいる自己のあり方）や義務自己（こうあるべきと考えている自己のあり方）の実現にも寄与することが明らかとなっている^[7]。上地・宮下^[8]は、理想自己-現実自己の不一致と自己愛的脆弱性、対人恐怖傾向との関連性について検討しており、現実自己-理想自己の不一致と自己愛的脆弱性の一部には正の関連が見られること、そして、両者は直接的・間接的に対人恐怖傾向を強めることを明らかとしている。対人恐怖や自己愛は精神的健康の低さと関連が見られること^[9]を踏まえると、ソーシャルサポートが充実していることは、結果的により良い自己の確立や精神的健康の高さに寄与すると考えられる。

従来、成人は友人よりも恋愛相手や配偶者といった別の関係性によるサポートが期待されてきた。しかし、内閣府の令和3年版少子化社会対策白書^[10]によると、日本人の未婚率は上昇し続けており、平成27年の段階で、30代の3、4人に1名は未婚という状況であり、男性の50歳時の未婚率が2040年には3割近くに上ると予測されている。このことは、現代社会において、恋愛相手や配偶者を含めた家族という友人関係とは別の関係性からのサポートを受けることのできない30代以上の人々が一定層いること、そしてそれが今後も増加する可能性が高いことを意味している。このような人々にとって、友人によるサポートは非常に重要であろう。これは、近親者のいない人は友人との交流が多いことを示した研究^[11]からも示唆される。

しかしながら、誰もが友人などの人とのつなが

りを気軽に作れるものではない。原田^[12]は、計量社会学の視点から、階層的地位（学歴・職業・所得）が親族や仕事仲間、友人などのネットワークに及ぼす影響について検討し、学歴の高い者ほど友人数が多いことを明らかにしている。また、平塚^[13]は、若年移行期（20歳から5年間）の関係性の推移をもとに本人が有している関係性を4つ（豊富・安定、ほぼ豊富・安定、やや限定・不安定、限定・不安定）に分け、就労形態との関連について検討している。その結果、男女ともに無業層は、豊富・安定の比率が低く、限定・不安定の比率が高いこと、そして、女性よりも男性において顕著であることを明らかにしている。つまり、自発性に基づいた関係性であると考えられる友人関係においてさえ、学歴や仕事などとの関連があり、当人の有するつながりの多さには大きな違いがある。さらに石田^[14]は、現代社会は、家族や地域など人々の拠り所となってきた中間集団が衰退し、人間関係をつなぎとめる外からの拘束が縮小したことにより、人々は自分が付き合いたい相手を選択して、関係を形成するようになったことに伴い、親しさを中心とした友人関係の役割が増してきたことを新聞記事による内容分析をもとに指摘している。自分が付き合いたい相手を選択するということは、相手から選択されなければ友人関係が形成できないことを意味している。つまり、学歴や仕事などに加えて、そもそも友人関係を形成・維持することが難しい社会に変化している可能性があり、そのことも当人が持つ人とのつながりの違いを助長させる可能性があるのではないだろうか。本田^[15]は、20代～60代の友人数とその内訳（学生時代からつき合っている友人か、卒業後に付き合い始めた友人かどうか）について検討しており、友人数には年代による違いは見られないが、30代を境に学生時代からつき合っている友人の数が減り、卒業後に付き合い始めた友人が増加することを明らかにしている。これは、卒業後に新たな友人関係を形成できない場合には、友人とのつながりが年を重ねるとともに減少していく可能性を示唆している。

近親者がおらず、友人との関わりが減少していくことは社会的孤立につながる可能性がある。かねてより、高齢者の社会的孤立は社会問題として取り上げられ、老年学の領域では高齢者の社会的孤立に焦点をあて、社会的孤立に関連する課題や

社会的孤立を解消するための介入研究がいくつも行われている（例えば、田高・河野・国井・岡本・山本^[16]；友永・野村・杉澤^[17]）。しかしながら、成人期に焦点を当て、社会的つながりを有していないことが当人にどのような影響をもたらしているのかについて検証しているものは数少ない。このような問題意識のもと、本田^[18]は、成人期以降の友人関係、そして、結婚関係に焦点をあて、友人関係や結婚関係を持たない人の特徴（アイデンティティ形成や主観的幸福感、人生の意味）について検証している。その結果、友人のいない人はいる人と比べてアイデンティティの確立ができていないこと、また、女性において、未婚で友人がいない人は *well-being* が低くなることが示された。一方で、友人の数による違いは認められないことが明らかとなった。つまり数の大小ではなく、一人でもいるかいないかという点が当人にとって大きな意味を持つ。本結果は、成人期以降においても友人関係を含めた人とのつながりは当人の精神的健康にとって重要であることを示唆しており、人とのつながりを持たない人への支援を考える上でも、さらなる研究の蓄積が必要であろう。

そこで、本研究では、成人期以降の友人関係を含めた人とのつながりに焦点をあて、友人関係を含め人とのつながりを持たない人の特徴（自己愛、ポジティブ感情特性、孤独感）について明らかにすることを目的とする。なお、友人関係に関する研究の多くが欧米で行われており、異文化間の視点から研究することの必要性を主張されている^[19]ことから、日本人サンプルとアメリカ人サンプルのデータを収集し、検討することとする。

2. 方法

2.1. 調査対象者

30代、40代の男女1,000名を調査対象者とした。それぞれの国に在住の日本人500名（男性250名、女性250名、 $M=40.11$, $SD=5.91$ ）、アメリカ人500名（男性250名、女性250名、 $M=39.18$, $SD=5.51$ ）であった。サンプルは、クロスマーケティング社の有するパネルを利用し、Web上にて参加者を募った。

2.2. 調査時期

2022年10月11日（火）～10月17日（月）にWebにより依頼を行い、回答を求めた。なお、本

研究は著者の所属する機関の研究倫理委員会の承認を受けたうえで行った。

2.3. 調査内容

(1) フェイスシート：性別、居住地域、婚姻状況、子どもの有無、職業についてたずねた。

(2) 友人関係：友人の有無、友人数、友人関係満足感（単一項目、7件法）、友人以外の心を許せる相手の有無についてたずねた。なお、友人がいないと回答した人に対しては、いつから友人がいないのか（時期）、友人を欲しいと思うかについてもたずねた。

(3) 病理的自己愛：日本版では、病理的自己愛尺度日本語版^[20]、アメリカ版では、Brief-Pathological Narcissism Inventory^[21]を使用した。本尺度は自己愛の病理性をより反映しながら、誇大性と脆弱性を包括的に測定できるという特徴をもつものであり、病理的自己愛は肯定的自己イメージに対する脅威や失望などに対して、不適応的な方略をとったり制御不全を起こしたりすることを特徴とする^[20]。どちらも28項目6件法（0. 自分にはまったくあてはまらない～5. 自分にとってもあてはまる, 0. Not at all like me～5. Very much like me）であった。

(4) ポジティブ感情特性：日本版では、日本語版 DPES^[22]、アメリカ版では、Dispositional Positive Emotion Scales^[23]を使用した。近年、ポジティブ感情をひとまとめにするのではなく、個々の感情の機能の違いに焦点を当てた研究が行われてきており、これらの尺度は様々なポジティブ感情特性を測定することのできるものである。どちらも38項目7件法（1. 全くそう思わない～7. 非常にそう思う, 1. Strongly disagree～7. Strongly agree）であった。

(5) 孤独感：日本版、アメリカ版ともに、Igarashi^[24]の孤独感尺度短縮版を使用した。3項目3件法（ほとんどない(Hardly ever)、たまにある(Some of the time)、よくある(often)）であった。

3. 結果

3.1. 国による友人の有無の違い

国によって友人の有無に違いがみられるかどうかを検討するために、 χ^2 検定を行ったところ、1%水準で有意であった（ $\chi^2(1)=52.92, p<.01$ ）。残差分析の結果、日本はいる人の割合よりもいない人の割合が多く、アメリカはいる人の割合が多く、いない人の割合が少なかった。

3.2. 国による友人数および友人関係満足感の違い

まず、国によって友人数に違いがみられるかどうかを検討するために、Mann-Whitney の U 検定を行った。その結果、日本よりアメリカの方が有意に高いことが示された ($U = 76142.50, p < .01, r = .14$)。次に、国によって友人関係満足感に違いがみられるかどうかを検討するために、 t 検定を行ったところ、1%水準で有意差が認められた ($t(848.87) = 4.18, p < .01, d = 0.28$)。日本 ($M = 5.10, SD = 1.24$) よりもアメリカ ($M = 5.47, SD = 1.40$) の得点が高かった。

3.3. 国による友人がいなくなった時期および友人希求、心を許せる相手の有無の違い

友人がいないと回答した人に対して、いつから友人がいなくなったのか、その時期および友人が欲しいと思うか、友人以外で心を許せる相手がいるかについてたずねている。国によっていなくなった時期に違いがみられるかどうかを検討するために、 χ^2 検定を行ったところ、1%水準で有意であった ($\chi^2(1) = 50.24, p < .01$)。残差分析の結果、日本では10歳未満の割合が少なく、20歳～29歳の割合が多かった。一方、アメリカでは10歳未満の割合が多く、20歳～29歳の割合が少なかった。しかしながら、友人が欲しいと思うかどうかについて t 検定を行ったところ有意な差は認められなかった ($t(42.48) = 1.67, n.s.$)。友人以外に心を許せる相手がいるかどうかについて国による違いがみられるかどうかを検討するために、 χ^2 検定を行ったところ、1%水準で有意であった ($\chi^2(1) = 8.02, p < .01$)。残差分析の結果、日本はいる人の割合よりもいない人の割合が多く、アメリカはいる人の割合が多く、いない人の割合が多かった。

今後の分析に用いるため、友人の有無と友人以外の心を許せる相手の有無を組み合わせ、新たな変数「人とのつながり」(友人有り・心を許せる他者有り・心を許せる他者無し)を作成した。具体的には、友人無しに関して、友人がいらないが心を許せる他者がいる人と友人も心を許せる他者もない人に分けた。その結果、日本では、友人有り(387名)、心を許せる他者有り(36名)、心を許せる他者無し(77名)、アメリカでは、友人有り(468名)、心を許せる他者有り(19名)、心を許せる他者無し(13名)であった。

3.4. 各変数の尺度得点の算出

本研究にて使用した尺度について、天井・フロアの項目を削除したのち、因子分析を行った。その後、それぞれ項目得点の合計を項目数で除し、尺度得点を算出した。

【日本】

まず、病的自己愛尺度日本語版(以下、PNI-J)については、因子分析(最尤法、プロマックス回転)の結果、「脆弱性:自己隠蔽・脱価値化(10項目, $\alpha = .92$)」、「脆弱性:権威的憤怒(5項目, $\alpha = .89$)」、「誇大性:誇大空想(4項目, $\alpha = .93$)」、「誇大性:搾取性(4項目, $\alpha = .83$)」、「誇大性:自己犠牲的自己高揚(2項目, $\alpha = .74$)」となった。次に、日本語版ポジティブ感情特性尺度(以下、DPES-J)については、因子分析(最小二乗法、プロマックス回転)の結果、「喜び・満足(11項目, $\alpha = .95$)」、「愉快・畏敬・誇り(7項目, $\alpha = .87$)」、「慈悲(4項目, $\alpha = .81$)」、「愛情(3項目, $\alpha = .81$)」となった。最後に孤独感については、3項目($\alpha = .82$)であった。平均値および標準偏差について Table 1 に示す。

【アメリカ】

まず、Brief-Pathological Narcissism Inventory(以下、PNI)については、因子分析(反復主因子法、プロマックス回転)の結果、「脆弱性:Devaluing(脱価値化)/Hiding the Self(自己隠蔽)(4項目, $\alpha = .73$)」、「誇大性:Grandiose Fantasy(誇大空想)(3項目, $\alpha = .76$)」となった。次に、Dispositional Positive Emotion Scales(以下、DPES)については、因子分析(最尤法、プロマックス回転)の結果、「Love/Awe/Joy(13項目, $\alpha = .92$)」、「Pride/Contentment(8項目, $\alpha = .92$)」、「Compassion(6項目, $\alpha = .85$)」、「Amusement(4項目, $\alpha = .82$)」となった。最後に孤独感については、3項目($\alpha = .81$)であった。平均値および標準偏差について Table 1 に示す。

Table 1 各変数の記述統計量

		平均値	標準偏差
PNI-J (6件法:0~5)	自己隠蔽・脱価値化	1.90	0.97
	権威的憤怒	1.61	1.06
	誇大妄想	1.47	1.21
	搾取性	1.51	1.03
	自己犠牲的自己高揚	2.38	1.06
DPES-J (7件法:1~7)	喜び・満足	3.47	1.22
	愉快・畏敬・誇り	3.34	1.04
	慈悲	3.97	1.14
	愛情	3.33	1.22
孤独感(3件法:1~3)		1.77	0.62
PNI (6件法:0~5)	Devaluing/Hiding the Self	2.11	1.36
	Grandiose Fantasy	2.24	1.46
	Love/Awe/Joy	3.91	1.39
DPES (7件法:1~7)	Pride/Contentment	4.18	1.53
	Compassion	5.00	1.35
	Amusement	4.35	1.59
孤独感(3件法:1~3)		1.89	0.62

3.5. 友人関係満足と他の変数との関連

友人関係満足と他の変数との関連について相関分析を行った。なお、友人関係においては性差が認められることから（例えば、和田（1993）^[25]），性別による違いも考慮する。そこで、国および性別ごとに分析を行った（Table 2,3）。

【日本】

まずは日本の結果について述べる。男性において、友人関係満足と自己隠蔽・脱価値化（ $r = -.18, p < .05$ ），権威的憤怒（ $r = -.17, p < .05$ ），孤独感（ $r = -.45, p < .01$ ）との間に有意な負の相関，喜び・満足（ $r = .14, p < .05$ ）との間に有意な正の相関が認められた。女性において、友人関係満足と自己隠蔽・脱価値化（ $r = -.25, p < .01$ ），権威的憤怒（ $r = -.22, p < .01$ ），搾取性（ $r = -.13, p < .05$ ），孤独感（ $r = -.22, p < .01$ ）との間に有意な負の相関，喜び・満足（ $r = .25$ ，

$p < .01$ ），愉快・畏敬・誇り（ $r = .15, p < .05$ ），慈悲（ $r = .19, p < .01$ ），愛情（ $r = .18, p < .05$ ）との間に有意な正の相関が認められた。

【アメリカ】

次にアメリカの結果について述べる。男性において、友人関係満足と孤独感（ $r = -.18, p < .01$ ）との間に有意な負の相関，Love/Awe/Joy（ $r = .29, p < .01$ ），Pride/Contentment（ $r = .30, p < .01$ ），Compassion（ $r = .20, p < .01$ ），Amusement（ $r = .15, p < .05$ ）との間に有意な正の相関が認められた。女性において、友人関係満足と Devaluing/Hiding the Self（ $r = -.18, p < .01$ ），孤独感（ $r = -.34, p < .01$ ）との間に有意な負の相関，Love/Awe/Joy（ $r = .19, p < .01$ ），Pride/Contentment（ $r = .20, p < .01$ ），Compassion（ $r = .14, p < .05$ ）との間に有意な正の相関が認められた。

3.6. 人とのつながりによる病的自己愛の違い

人とのつながりによって病的自己愛の違いがみられるかどうかを検討する。そこで、国ごとに、人とのつながりと性別を独立変数，PNI, PNI-J を従属変数とした 2 要因参加者間分散分析を行った。

【日本】

まずは日本の結果について述べる。自己隠蔽・脱価値化において、人とのつながりの主効果が有意傾向（ $F(2,494) = 2.59, p < .10, \eta_p^2 = .01$ ）であったが、多重比較の結果、差は見られなかった。権威的憤怒において、性別の主効果が見られ（ $F(1,494) = 4.20, p < .05, \eta_p^2 = .01$ ），男性（ $M = 1.75, SD = 1.14$ ）の方が女性（ $M = 1.45, SD = 1.02$ ）よりも高かった。誇大妄想において、性別の主効果が見られ（ $F(1,494) = 6.43, p < .05, \eta_p^2 = .01$ ），男性（ $M = 1.65, SD = 1.26$ ）の方が女性（ $M = 1.23, SD = 1.23$ ）よりも高かった。

Table 2 性別ごとの相関分析（日本）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. 友人関係満足	—	-.25 **	-.22 **	-.07	-.13 *	-.06	.25 **	.15 *	.19 **	.18 *	-.22 **
2. 自己隠蔽・脱価値化	-.18 *	—	.69 **	.46 **	.34 **	.30 **	-.14 *	.10	.03	-.02	.31 **
3. 権威的憤怒	-.17 *	.75	—	.60 **	.57 **	.30 **	.05	.24 **	-.04	.08	.12 *
PNI-J 4. 誇大妄想	-.01	.54 **	.63 **	—	.51 **	.24 **	.12 *	.26 **	-.02	.20 **	-.04
5. 搾取性	-.04	.47 **	.65 **	.63 **	—	.21 **	.33 **	.51 **	.14 *	.35 **	-.22 **
6. 自己犠牲的自己高揚	.09	.38 **	.38 **	.39 **	.33 **	—	.23 **	.21 **	.38 **	.23 **	.02
7. 喜び・満足	.14 *	.12 *	.22 **	.31 **	.44 **	.32 **	—	.73 **	.54 **	.68 **	-.40 **
DPES-J 8. 愉快・畏敬・誇り	.07	.32 **	.41 **	.44 **	.52 **	.41 **	.77 **	—	.59 **	.68 **	-.29 **
9. 慈悲	.02	.25 **	.28 **	.32 **	.31 **	.45 **	.63 **	.71 **	—	.56 **	-.13 *
10. 愛情	.11	.23 **	.31 **	.47 **	.40 **	.45 **	.75 **	.67 **	.56 **	—	-.30 **
11. 孤独感	-.45 **	.18 **	.06	-.05	-.16 *	-.13 *	-.47 **	-.32 **	-.14 *	-.42 **	—

** $p < .01$, * $p < .05$

左下が男性，右上が女性

Table 3 性別ごとの相関分析 (アメリカ)

		1	2	3	4	5	6	7	8
	1. 友人関係満足	—	-.18 **	-.07	.19 **	.20 **	.14 *	.07	-.34 **
PNI	2. Devaluing/Hiding the Self	-.02	—	.59 **	.04	-.06	.18 **	.26 **	.33 **
	3. Grandiose Fantasy	-.02	.67 **	—	.22 **	.05	.25 **	.30 **	.15 *
DPES	4. Love/Awe/Joy	.29 **	.29 **	.29 **	—	.80 **	.48 **	.54 **	-.34 **
	5. Pride/Contentment	.30 **	.20 **	.18 **	.82 **	—	.43 **	.44 **	-.44 **
	6. Compassion	.20 **	.23 **	.31 **	.63 **	.65 **	—	.36 **	-.05
	7. Amusement	.15 *	.25 **	.35 **	.64 **	.55 **	.55 **	—	-.13 *
	8. 孤独感	-.18 **	.29 **	.19 **	-.21 **	-.29 **	-.07	-.09	—

** $p < .01$, * $p < .05$

左下が男性, 右上が女性

搾取性において, 人とのつながり ($F(2,494)=4.09$, $p<.05$, $\eta_p^2=.02$), 性別 ($F(1,494)=8.00$, $p<.01$, $\eta_p^2=.02$) の主効果が見られた. 人とのつながりに関して, 友人有り ($M=1.58$, $SD=1.00$) の方が心を許せる他者無し ($M=1.22$, $SD=1.00$) よりも高かった. 性別に関して, 男性 ($M=1.61$, $SD=1.09$) の方が女性 ($M=1.21$, $SD=1.00$) よりも高かった. 自己犠牲的自己高揚において, 人とのつながり ($F(2,494)=17.73$, $p<.01$, $\eta_p^2=.07$) の主効果が有意, 人とのつながりと性別の交互作用 ($F(2,494)=2.66$, $p<.10$, $\eta_p^2=.01$) が有意傾向であった.

人とのつながりに関して, 友人有り ($M=2.50$, $SD=1.03$), 心を許せる他者有り ($M=2.50$, $SD=1.07$) の方が心を許せる他者無し ($M=1.73$, $SD=0.96$) よりも高かった. 交互作用に関して, 単純主効果について検討したところ, 心を許せる他者有りにおいて, 男性 ($M=2.86$, $SD=1.00$) の方が女性 ($M=2.14$, $SD=1.14$) よりも高かった.

また, 男性において, 心を許せる他者有り ($M=2.86$, $SD=1.00$) の方が心を許せる他者無し ($M=1.63$, $SD=0.92$) よりも高かった. そして, 女性において, 友人有り ($M=2.52$, $SD=1.05$) の方が心を許せる他者無し ($M=1.83$, $SD=1.00$) よりも高かった. それ以外に有意差は見られなかった (Table 4).

【アメリカ】

次にアメリカの結果について述べる. Grandiose Fantasy において, 性別の主効果が見られ ($F(1,494)=4.40$, $p<.05$, $\eta_p^2=.01$), 男性 ($M=2.66$, $SD=1.55$) の方が女性 ($M=1.88$, $SD=1.49$) よりも高かった. Devaluing/Hiding the Self において, 性別の主効果が有意傾向 ($F(1,494)=3.07$, $p<.10$, $\eta_p^2=.01$) であったが, 多重比較の結果, 差は見られなかった.

それ以外, 有意差は見られなかった (Table 5).

3.7. 人とのつながりによるポジティブ感情特性の違い

人とのつながりによってポジティブ感情特性に違いがみられるかどうかを検討するために, 国ごとに, 人とのつながりと性別を独立変数, DPES, DPES-J を従属変数とした 2 要因参加者間分散分析を行った.

【日本】

まずは日本の結果について述べる. 喜び・満足において, 人とのつながり ($F(2,494)=13.85$, $p<.01$, $\eta_p^2=.05$) の主効果が有意, 人とのつながりと性別の交互作用 ($F(2,494)=2.76$, $p<.10$, $\eta_p^2=.01$) が有意傾向であった. 人とのつながりに関して, 友人有り ($M=3.63$, $SD=1.15$) の方が心を許せる他者無し ($M=2.86$, $SD=1.29$) よりも高かった. 交互作用に関して, 単純主効果について検討したところ, 心を許せる他者無しにおいて, 女性 ($M=3.20$, $SD=1.41$) の方が男性 ($M=2.52$, $SD=1.17$) よりも高かった. また, 男性において, 友人有り ($M=3.60$, $SD=1.11$), 心を許せる他者有り ($M=3.40$, $SD=1.18$) の方が心を許せる他者無し ($M=2.52$, $SD=1.17$) よりも高かった. 愉快・畏敬・誇りにおいて, 人とのつながり ($F(2,494)=12.77$, $p<.01$, $\eta_p^2=.05$) の主効果が有意, 人とのつながりと性別の交互作用 ($F(2,494)=2.83$, $p<.10$, $\eta_p^2=.01$) が有意傾向であった. 人とのつながりに関して, 友人有り ($M=3.47$, $SD=0.97$) の方が心を許せる他者無し ($M=2.86$, $SD=1.18$) よりも高かった. 交互作用に関して, 単純主効果について検討したところ, 男性において, 友人有り ($M=3.56$, $SD=$

0.96), 心を許せる他者有り ($M=3.32$, $SD=1.10$)の方が心を許せる他者無し ($M=2.68$, $SD=1.05$)よりも高かった。慈悲において、人とのつながりの主効果が有意であった ($F(2,494)=22.07$, $p<.01$, $\eta^2=.08$)。友人有り ($M=4.12$, $SD=1.07$), 心を許せる他者有り ($M=3.99$, $SD=1.01$)の方が心を許せる他者無し ($M=3.20$, $SD=1.15$)よりも高かった。愛情において、人とのつながり ($F(2,494)=13.61$, $p<.01$, $\eta^2=.05$)の主効果が有意, 人とのつながりと性別の交互作用 ($F(2,494)=2.79$, $p<.10$, $\eta^2=.01$)が有意傾向であった。人とのつながりに関して、友人有り ($M=3.49$, $SD=1.16$), 心を許せる他者有り ($M=2.94$, $SD=1.36$)の方が心を許せる他者無し ($M=2.77$, $SD=1.18$)よりも高かった。交互作用に関して、単純主効果について検討したところ、心を許せる他者無しにおいて、女性 ($M=3.10$, $SD=1.24$)の方が男性 ($M=2.45$, $SD=1.13$)よりも高かった。また、男性において友人有り ($M=3.47$, $SD=1.08$)の方が心を許せる他者無し ($M=2.45$, $SD=1.13$)よりも高かった。そして、女性において友人有り ($M=3.51$, $SD=1.23$)の方が心を許せる他者有り ($M=2.78$, $SD=1.23$)よりも高かった (Table 6)。

【アメリカ】

次にアメリカの結果について述べる。Love/Awe/Joyにおいて、人とのつながりの主効果が有意であった ($F(2,494)=5.71$, $p<.01$, $\eta^2=.02$)。友人有り ($M=3.96$, $SD=1.36$)の方が心を許せる他者無し ($M=2.68$, $SD=0.91$)よりも高かった。また、性別の主効果が有意傾向

Pride/Contentmentにおいて、人とのつながりの主効果が有意であった ($F(2,494)=3.60$, $p<.05$, $\eta^2=.01$)。友人有り ($M=4.22$, $SD=1.52$)の方が心を許せる他者無し ($M=3.07$, $SD=1.28$)よりも高かった。Compassionにおいて、人とのつながりの主効果が有意であった ($F(2,494)=5.45$, $p<.01$, $\eta^2=.02$)。友人有り ($M=5.03$, $SD=1.31$), 心を許せる他者有り ($M=5.05$, $SD=1.63$)の方が心を許せる他者無し ($M=3.75$, $SD=1.95$)よりも高かった。Amusementにおいて、人とのつながりの主効果が有意であった ($F(2,494)=7.49$, $p<.01$, $\eta^2=.03$)。友人有り ($M=4.39$, $SD=1.54$), 心を許せる他者有り ($M=4.39$, $SD=1.81$)の方が心を許せる他者無し ($M=2.66$, $SD=1.26$)よりも高かった (Table 7)。

3.8. 人とのつながりによる孤独感の違い

人とのつながりによって孤独感に違いがみられるかどうかを検討するために、国ごとに、人とのつながりと性別を独立変数、孤独感を従属変数とした2要因参加者間分散分析を行った (Table 8)。

【日本】

まずは日本の結果について述べる。人とのつながり ($F(2,494)=27.897$, $p<.01$, $\eta^2=.10$)の主効果, 人とのつながりと性別の交互作用 ($F(2,494)=4.80$, $p<.01$, $\eta^2=.02$)が有意であった。人とのつながりに関して、心を許せる他者有り ($M=2.10$, $SD=0.53$), 心を許せる他者無し ($M=2.15$, $SD=0.69$)の方が友人有り ($M=1.67$, $SD=0.56$)よりも高かった。交互作用に関して、単純主効果について検討したところ、心を許せる他者有りにおいて、女性 ($M=2.39$, $SD=0.50$)の方が男性 ($M=1.82$, $SD=0.55$)よりも高かった。また、男性において心を許せる他者無し ($M=2.20$, $SD=0.68$)の方が友人有り ($M=1.69$, $SD=0.58$), 心を許せる他者有り ($M=1.82$, $SD=0.55$)よりも高かった。そして女性において心を許せる他者有り ($M=2.39$, $SD=0.50$), 心を許せる他者無し ($M=2.11$, $SD=0.71$)の方が友人有り ($M=1.65$, $SD=0.55$)よりも高かった。

【アメリカ】

次にアメリカの結果について述べる。人とのつながり ($F(2,494)=4.00$, $p<.05$, $\eta^2=.02$)の主効果が有意, 人とのつながりと性別の交互作用 ($F(2,494)=2.96$, $p<.10$, $\eta^2=.01$)が有意傾向であった。人とのつながりに関して、心を許せる他者有り ($M=2.28$, $SD=0.45$)の方が友人有り ($M=1.87$, $SD=0.62$)よりも高かった。交互作用に関して、単純主効果について検討したところ、心を許せる他者有りにおいて、男性 ($M=2.61$, $SD=0.39$)の方が女性 ($M=1.95$, $SD=0.51$)よりも高かった。また、男性において心を許せる他者有り ($M=2.61$, $SD=0.39$)の方が友人有り ($M=1.83$, $SD=0.58$)よりも高かった。

Table 4 人とのつながりと性別による PNJ-J の違い（日本）

	男性			女性			F 値 (df=5,494)	効果量 (η^2)	多重比較
	友人有り (n=185)	友人無し 心を許せる他 者有り (n=18)	心を許せる他 者無し (n=47)	友人有り (n=202)	友人無し 心を許せる他 者有り (n=18)	心を許せる他 者無し (n=30)			
自己隠蔽・脱価値化	1.97 (0.92)	2.32 (0.91)	2.04 (1.08)	1.75 (0.99)	2.17 (1.15)	1.77 (0.81)	2.59 † 2.60 .05	.01 .01 .00	
権威的憤怒	1.81 (1.07)	1.84 (1.26)	1.60 (1.09)	1.46 (1.02)	1.43 (1.17)	1.46 (0.86)	.30 4.20 * .35	.00 .01 .00	男性>女性
誇大空想	1.80 (1.20)	1.78 (1.60)	1.37 (0.97)	1.23 (1.16)	1.40 (1.42)	1.05 (1.12)	2.22 6.43 * .42	.01 .01 .00	男性>女性
搾取性	1.71 (0.97)	1.89 (1.31)	1.24 (0.99)	1.45 (1.02)	1.00 (0.97)	1.19 (1.01)	4.09 * 8.00 ** 2.13	.02 .02 .01	友人有り>心を許せる他者無し 男性>女性
自己犠牲的自己高揚	2.49 (1.01)	2.86 (1.00)	1.63 (0.92)	2.52 (1.05)	2.14 (1.14)	1.83 (1.00)	17.73 ** 1.30 2.66 †	.07 .00 .01	友人有り, 心を許せる他者有り>心を許せる他者無し 心を許せる他者有り: 男性>女性 男性: 友人有り, 心を許せる他者有り>心を許せる他者無し 女性: 友人有り>心を許せる他者無し

注1) セルの上段の数値は平均、下段の () 内の数値は標準偏差である。

注2) 人とのつながりのF値と効果量は上段、性別のF値と効果量は中段、交互作用のF値と効果量は下段に示されている。

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 5 人とのつながりと性別による PNJ の違い（アメリカ）

	男性			女性			F 値 (df=5,494)	効果量 (η^2)	多重比較
	友人有り (n=239)	友人無し 心を許せる他 者有り (n=6)	心を許せる他 者無し (n=5)	友人有り (n=229)	友人無し 心を許せる他 者有り (n=13)	心を許せる他 者無し (n=8)			
Devaluing/Hiding the Self	2.17 (1.41)	2.96 (1.02)	2.65 (0.72)	2.01 (1.32)	2.25 (1.35)	1.72 (1.31)	1.16 3.07 † .78	.01 .01 .00	
Grandiose Fantasy	2.36 (1.48)	2.89 (1.53)	2.73 (1.66)	2.12 (1.43)	2.08 (1.72)	1.46 (1.32)	.29 4.40 * 1.03	.00 .01 .00	男性>女性

注1) セルの上段の数値は平均、下段の () 内の数値は標準偏差である。

注2) 人とのつながりのF値と効果量は上段、性別のF値と効果量は中段、交互作用のF値と効果量は下段に示されている。

* $p < .05$, † $p < .10$

Table 6 人とのつながりと性別による DPES-J の違い（日本）

	男性			女性			F 値 (df=5,494)	効果量 (η^2)	多重比較
	友人有り (n=185)	友人無し 心を許せる他 者有り (n=18)	心を許せる他 者無し (n=47)	友人有り (n=202)	友人無し 心を許せる他 者有り (n=18)	心を許せる他 者無し (n=30)			
喜び・満足	3.60 (1.11)	3.40 (1.18)	2.52 (1.17)	3.66 (1.20)	3.12 (1.15)	3.20 (1.41)	13.85 ** .90 2.76 †	.05 .00 .01	友人有り>心を許せる他者無し 心を許せる他者無し: 男性<女性 男性: 友人有り, 心を許せる他者有り>心を許せる他者無し
愉快・畏敬・誇り	3.56 (0.96)	3.32 (1.10)	2.68 (1.05)	3.38 (0.99)	2.84 (0.94)	3.04 (1.31)	12.77 ** .47 2.83 †	.05 .00 .01	友人有り>心を許せる他者無し 男性: 友人有り, 心を許せる他者有り>心を許せる他者無し
慈悲	3.95 (1.04)	4.04 (0.94)	2.98 (1.18)	4.29 (1.11)	3.93 (1.08)	3.43 (1.11)	22.07 ** .84 2.16	.08 .00 .00	友人有り, 心を許せる他者有り>心を許せる他者無し
愛情	3.47 (1.08)	3.11 (1.32)	2.45 (1.13)	3.51 (1.23)	2.78 (1.41)	3.10 (1.24)	13.61 ** .50 2.79 †	.05 .00 .01	友人有り>心を許せる他者有り, 心を許せる他者無し 心を許せる他者無し: 男性<女性 男性: 友人有り>心を許せる他者無し 女性: 友人有り>心を許せる他者有り

注1) セルの上段の数値は平均、下段の () 内の数値は標準偏差である。

注2) 人とのつながりのF値と効果量は上段、性別のF値と効果量は中段、交互作用のF値と効果量は下段に示されている。

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 7 人とのつながりと性別による DPES の違い (アメリカ)

	男性			女性			F 値 (df=5,494)	効果量 (η^2)	多重比較
	友人有り (n=239)	友人無し 心を許せる他 者有り (n=6)	友人無し 心を許せる他 者無し (n=5)	友人有り (n=229)	友人無し 心を許せる他 者有り (n=13)	友人無し 心を許せる他 者無し (n=8)			
Love/Awe/Joy	4.20 (1.38)	3.94 (1.05)	2.99 (0.69)	3.72 (1.33)	3.30 (1.50)	2.39 (1.14)	5.71 ** 2.81 † .04	.02 .01 .00	友人有り > 心を許せる他者無し
Pride/Contentment	4.47 (1.49)	3.96 (1.20)	3.35 (1.70)	3.97 (1.54)	4.08 (1.54)	2.78 (0.86)	3.60 * .68 .34	.01 .00 .00	友人有り > 心を許せる他者無し
Compassion	5.05 (1.29)	4.69 (1.86)	3.47 (1.77)	5.00 (1.34)	5.41 (1.40)	4.04 (2.13)	5.45 ** 1.49 .95	.02 .00 .00	友人有り, 心を許せる他者有り > 心を許せる他者無し
Amusement	4.69 (1.50)	4.33 (1.88)	2.85 (0.68)	4.09 (1.57)	4.44 (1.75)	2.47 (1.85)	7.49 ** .55 .44	.00 .01 .00	友人有り, 心を許せる他者有り > 心を許せる他者無し

注1) セルの上段の数値は平均、下段の () 内の数値は標準偏差である。

注2) 人とのつながりのF値と効果量は上段、性別のF値と効果量は中段、交互作用のF値と効果量は下段に示されている。

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 8 人とのつながりと性別による孤独感の違い

	男性			女性			F 値 (df=5,494)	効果量 (η^2)	多重比較
	友人有り (n=185/239)	友人無し 心を許せる他 者有り (n=18/6)	友人無し 心を許せる他 者無し (n=47/5)	友人有り (n=202/229)	友人無し 心を許せる他 者有り (n=18/13)	友人無し 心を許せる他 者無し (n=30/8)			
孤独感 (日本)	1.69 (0.58)	1.82 (0.55)	2.20 (0.68)	1.65 (0.55)	2.39 (0.50)	2.11 (0.71)	27.90 ** 3.38 † .02	.10 .01 .02	友人有り < 心を許せる他者有り, 心を許せる他者無し 心を許せる他者有り: 男性 < 女性 男性: 友人有り, 心を許せる他者有り < 心を許せる他者無し 女性: 友人有り < 心を許せる他者有り, 心を許せる他者無し
孤独感 (アメリカ)	1.83 (0.58)	2.61 (0.39)	2.13 (0.77)	1.91 (0.65)	1.95 (0.51)	2.00 (0.82)	4.00 * 2.37 2.96 †	.02 .01 .01	友人有り < 心を許せる他者有り 心を許せる他者有り: 男性 > 女性 男性: 友人有り < 心を許せる他者有り

注1) セルの上段の数値は平均、下段の () 内の数値は標準偏差である。また人数に関して、左が日本、右がアメリカである。

注2) 人とのつながりのF値と効果量は上段、性別のF値と効果量は中段、交互作用のF値と効果量は下段に示されている。

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

4. 考察

4.1. 国による友人数, 友人関係満足感, 友人のいなくなった時期の違い

分析の結果、日本はアメリカと比べて、友人のいない人の割合が多く、友人数が少なく、友人関係満足感が低いことが明らかとなった。また、友人がいなくなった時期の違いとして、日本では10歳未満の割合が少なく、20歳～29歳の割合が多かった。一方、アメリカでは10歳未満の割合が多く、20歳～29歳の割合が少なかった。令和5年度我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査^[26]によると、日本は、悩みや心配事を相談する相手として友人を選択する割合が高く、友人の重要度は高いと考えられる。しかしながら、悩みや心配事というのは深い自己開示に該当し、アメリカ人と比較すると日本人の自己開示が低いことが示されていることを踏まえると^[27]、友人の数はアメリカの方が多くなるのではないだろうか。また、所得格差の大きい国や個人主義的な国の人々は、友人関係を大切にすることが当人の健康や主観的幸

福感と関連するため^[28]、日本よりもアメリカの方が友人を積極的に作り、関わっている可能性もあるが、この点は今後検討が必要であろう。

4.2. 国による人とのつながりの有無および性別と病理的自己愛の関連

分析の結果、日本においては、心を許せる他者が無い人は、搾取性、自己犠牲的自己高揚の数値が低いこと、権威的憤怒、誇大妄想、搾取性において女性よりも男性の方が得点が高いことが明らかとなった。アメリカにおいては、人とのつながりの有無との関連は見られず、Grandiose Fantasyにおいて女性よりも男性の得点が高かった。性差に関して、先行研究において誇大性は女性よりも男性^[29]が、脆弱性の一部において男性よりも女性^[30]が高いことが示されている。本研究の結果は誇大性に関しては先行研究と同様の結果であったが、脆弱性に関して、日本では権威的憤怒が男性の方が高く、アメリカでは男女に違いが認められなかった。先行研究^[30]では、権威的憤怒に関連する因

子は性差がなかったため、日本の結果のみ先行研究と異なっていた。権威的憤怒とは「特権意識に基づく期待が満たされなかったときに生じる怒り感情」である。権威的憤怒は攻撃性と正の相関があるとされ^[20]、攻撃性における性差^[31]を考えると、日本での結果は解釈可能であろう。

次に、心を許せる他者が無い人に関して、搾取性と自己犠牲的自己高揚の数値が低かった点について検討する。先行研究^[20]において、搾取性は、自尊感情や仮想的有能感、外向性、勤勉性、開放性と正の相関がみられていた。また、自己犠牲的自己高揚は、自己価値の随伴性と正の相関がみられていた。自己価値の随伴性とは、個人の自尊感情がどの程度、外的な達成や期待に随伴しているかを測定しているものであり、不適応的な側面のみならず適応的意義があることが指摘されている^[32]。病理的自己愛は、自己愛の不適応的な側面について焦点を当てているものであるが、詳細に見ていくと、自己愛の適応的な側面も含まれていると考えられる。そのように考えると、人とのつながりが無い人は自己愛に関する両価的な側面の低さが特徴として見られるのかもしれない。

4.3. 国による人とのつながりの有無および性別とポジティブ感情特性の関連

分析の結果、日本・アメリカ両方において、心を許せる他者のいない人はそうでない人と比べてポジティブ感情特性が低いことが明らかとなった。ポジティブ感情は個々によって機能の違いは見られるが、おおむね対人関係や精神的健康に寄与するといった適応的な機能^[22]がある。人とのつながりが無い人は、ポジティブ感情特性の低さが特徴として見られ、そのことが、当人に精神的健康を低めている可能性があると考えられる。性差に関してはほとんど見いだされなかったが、これは先行研究^[22]と同様の結果であり、ポジティブ感情特性については性別による違いはないと判断できる。

4.4. 国による人とのつながりの有無および性別と孤独感の関連

分析の結果、国によって関連が異なっていた。日本においては、心を許せる他者のいない人は男女ともに孤独感が高かった。しかしながら、アメリカにおいては、男性において、心を許せる他者有りの孤独感が高いという結果であった。国によ

って結果が異なった点は興味深い。日本においては、男女とも友人含め人とのつながりが無いことが孤独感を高めている可能性がある。これは友人のいない人は主観的幸福感が高いこと^[18]、そしていくつかの研究から、主観的幸福感と孤独感には負の相関が見られることを踏まえると、本研究の結果はこれまでの知見を支持するものと考えられる。一方で、アメリカにおいて異なる結果が見いだされた理由については、友人との関係がなくなった時期との関連が考えられる。アメリカでは10歳以降に友人との関係がなくなる人はほとんどいなかった。そして、全体の数としても少ないことを考えると、友人のいない人というのはかなり限定的（19名）であり、そのことが結果に影響している可能性が考えられる。

4.5. 問題点と今後の展望

最後に本研究の問題点と今後の展望について述べる。問題点としては、分散分析の結果に関して、各群の人数の偏りがある点があげられる。日本・アメリカともに友人がいない人の数が少ないため、偏りが出ている点は課題であろう。また、本研究では友人を含め人とのつながりが無い人の特徴について明らかにすることを目的としているが、人とのつながりが無い人たちの中でも、過去から一貫してない人とある時点まではつながりを有していたが途中で無くなった人などいくつかパターンがあると考えられる。また、無くなった人の中でのその理由も様々なであろう。関係の解消の仕方によりその後の結果が異なる可能性が示唆されており^[33]、今後は縦断研究や質的アプローチも含め研究を蓄積していく必要があるだろう。また、本研究では日本とアメリカによる比較を行ったが、他の文化圏のデータを収集し比較することも必要であろう。

付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号：N2214）の助成を受けたものである。本稿の一部は、日本健康心理学会第35回大会におけるシンポジウム「青年期の適応問題－青年心理学と健康心理学の観点から－」において「友人関係の有無が本人の適応に与える影響」として報告している。

引用文献

- [1] 本田周二. 成人の友人関係と精神的健康, パーソナリティの関連. 人間関係学研究. 2021, 22, p.83-90.
- [2] 野邊政雄ほか. 日本における高齢者の友人関係に関する研究動向. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録. 2010, 145, p.53-58.
- [3] 厚生労働省. 令和4年労働安全衛生調査(実態調査). 2023.
- [4] 厚生労働省社会・援護局総務課自殺対策推進室. 令和4年中における自殺の状況. 2023.
- [5] Dickie, C. Exploring Workplace Friendships in Business: Cultural Variations of Employee Behaviour. *Research and Practice in Human Resource Management*. 2009, 17, p.128-137.
- [6] Sias, P. M., et al. Narratives of workplace friendship deterioration. *Journal of Social and Personal Relationships*. 2004, 21, p.321-340.
- [7] 浅野良輔ほか. 日本語版知覚された目標サポート尺度の作成－異性・同性友人関係における構成概念妥当性の検討－. 教育心理学研究. 2014, 62, p.240-252.
- [8] 上地雄一郎ほか. 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性. パーソナリティ研究. 2009, 17, p.280-291.
- [9] 清水健司ほか. 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連. パーソナリティ研究. 2008, 16, p.350-362.
- [10] 内閣府. 令和3年年版少子化社会対策白書. 2021.
- [11] Margolis, R., et al. The Physical, Mental, and Social Health of Middle-aged and Older Adults Without Close Kin in Canada. *The Journals of Gerontology: Social Sciences*. 2022, 77, 1350-1360.
<https://doi.org/10.1093/geronb/gbab222>, (accessed 2024年2月8日)
- [12] 原田謙. 社会的ネットワークと幸福感－計量社会学で見る人間関係. 2017, 勁草書房.
- [13] 平塚直樹. 若者の移行の背景・過程とソーシャル・キャピタル 乾彰夫・本田由紀・中村高康編 危機のなかの若者たち－教育とキャリアに関する5年間の追跡調査. 2017, 東京大学出版会, p.335-359.
- [14] 石田光規. 友人の社会史. 2021, 晃洋書房.
- [15] 本田周二. 世代間比較による友人関係の特徴について2. 日本青年心理学会第27回大会発表論文集. 2019, p.45-46.
- [16] 田高悦子ほか. 大都市の一人暮らし男性高齢者の社会的孤立にかかわる課題の質的記述的研究. 日本地域看護学会誌. 2013, 15, p.4-11.
- [17] 友永美帆ほか. 高齢者の社会的孤立への介入の効果評価研究のバイアスの可能性. 老年学雑誌. 2020, 11, p.29-43.
- [18] 本田周二. 成人期における友人関係・結婚関係の有無が当人のアイデンティティ, 人生の意味, 主観的幸福感に及ぼす影響. キャリア教育研究. 2022, 41, p.1-9.
- [19] Keller, M. A cross-cultural perspective on friendship research. *ISSBD Newsletter*, 2004, 46, p.10-14.
- [20] 川崎直樹ほか. 病理的自己愛目録日本語版(PNI-J)の作成. 心理学研究. 2021, 92, p.21-30.
- [21] Schoenleber, M., et al. Development of a brief version of the pathological narcissism inventory. *Psychological Assessment*. 2015, 27, p.1520-1526.
- [22] 菅原大地ほか. 日本語版 DPES 作成の試み. 健康心理学研究. 2020, 33, p.57-65.
- [23] Shiota, M. N., et al. Positive emotion dispositions differentially associated with Big Five personality and attachment style. *The Journal of Positive Psychology*. 2006, 1, p.61-71.
- [24] Igarashi, T. Development of the Japanese version of the Three-Item Loneliness Scale. *BMC Psychology*. 2019, 7, p.1-8.
- [25] 和田実. 同性友人関係: その性および性役割タイプによる差異. 社会心理学研究. 1993, 8, p.67-75.
- [26] 内閣府. 我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査. 2024, こども家庭庁.
- [27] Schung, J et al. 自己開示の日米差: 社会生態学的アプローチからの再解釈. 日本心理学会第72回大会発表論文集. 2008, p.125.
- [28] Lu P., et al. Friendship importance around the world: Links to cultural factors, health, and well-being. *Frontiers in Psychology*. 2021, 11, p.1-15.
- [29] 松並知子. 自己愛の病理性の性差-他者への依存と自己誇大化. パーソナリティ研究. 2014, 22, p.239-251.
- [30] 上地雄一郎ほか. コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成. パーソナリティ研究. 2005, 14, p.80-91.
- [31] 横田晋大. 攻撃性の男女差の進化的起源－進化心理学の観点から－. 心理学評論. 2017, 60, p.15-22.

[32]伊藤正哉ほか. 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討—本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して—. 教育心理学研究. 2006, 54, p.222-232.

[33]Vieth, G., et al. Friendship loss and dissolution in adulthood: A conceptual model. Current Opinion in Psychology. 2022, 43, p.171-175.

Abstract

In this study, we focus on connections including friendships in adulthood and beyond, and aim to clarify the characteristics (narcissism, positive emotional traits, and loneliness) of people who do not connect with others including friendships. We collected and examined data from a Japanese sample ($n=500$, $M=40.11$, $SD=5.91$) and an American sample ($n=500$, $M=39.18$, $SD=5.51$) in their 30s and 40s. The sample was drawn from a panel owned by Cross Marketing, Inc. and participants were recruited via the Web. The results of the analysis revealed that those who were not connected to others were characterized by low narcissism, low positive emotional traits, and high loneliness. We also found some differences among countries in the number of friendless people, their satisfaction with friendships, and their loneliness. Future work will require longitudinal studies, qualitative approaches, and the collection and comparison of data from other cultures.

(受付日: 2025 年 5 月 27 日, 受理日: 2025 年 6 月 18 日)



本田 周二 (ほんだ しゅうじ)

現職: 大妻女子大学人間関係学部人間関係学科 社会・臨床心理学専攻 教授

プロフィール:

東洋大学大学院 社会学研究科 博士後期課程修了. 博士 (社会心理学).

専門は社会心理学, キャリア教育.

日本青年心理学会 研究委員会委員 (2023~現在まで).

日本健康心理学会 資格認定委員会委員 (2023~現在まで).

日本心理学会 認定心理士の会 関東支部 運営委員 (2024~現在まで).

日本キャリア教育学会 情報委員会委員 (2019~現在まで).

日本キャリア教育学会 学会誌編集委員会委員 (2025~現在まで).

日本キャリア教育学会 関東地区理事 (2025~現在まで).

1981 年福井県生まれ. 東洋大学大学院修了後, 神戸学院大学, 鳴門教育大学, 島根大学を経て, 2016 年より大妻女子大学に勤務している.

2000 年代より青年期の友人関係研究に従事, また, 現在は科研費 (研究分担者) において, 教師と心理職の協働システムに関する国際比較研究を行っている.

主な著書:

公認心理師必携テキスト (共著, 学研メディカル秀潤社), メディカルスタッフのための基礎からわかる人間関係論 (共著, 南山堂), 心理学大図鑑 (監訳, ニュートンプレス), 新・心理学を今に活かす (共著, 教育情報出版).